２０２１．１２．１３　全校朝会講話

時として「いじり」は「いじめ」より怖い！

校長　松本　雅史

先週は、暴力は絶対にいけないという話をしました。暴言も言葉の暴力です。暴力や暴言は、子ども同士はもちろんですが、大人もいけないことは同じです。それは、先生や親でもだめなものはだめです。先週は、そういう話をしました。

今朝は、その続きを話します。今朝のテーマは「いじり」です。低学年の皆さんの中には、何のことか分からない人もいるでしょう。「いじり」ってくすぐったいことをするのかなぁ、と思うかもしれませんね。

「いじり」というのは、その人のくせや言葉、態度、性格などをおもしろおかしく取り上げて、周りの笑いをとる一つのコミュニケーションです。他人をもてあそんだり、困らせたりして周りの笑いをとろうとすることです。誰かに損な役回りを押しつけることで、楽しい場の雰囲気をつくろうとします。いやな役回りを押しつけられる人を「いじられ役」というのですが、この役回りは、ある日突然やってきます。そして、「いじり」に対して怒ったり、無視したりすると、「せっかく楽しい雰囲気作ろうとしてんのに、あいつ本当に空気読めないんだから！」となります。「真面目にやっているのではなくて、『ノリ』でやっているのだから、そのくらい分かれよ！」というのが、「いじり」をする側の言い分です。しかし、この『ノリ』というのも危険です。深い意味はなく、その場の雰囲気や勢いというニュアンスなのでしょうが、雰囲気で人をからかい、馬鹿にして楽しむということになると思います。標的にされた人はたまったものではないですが、一応かたちだけでも応じてしまうことが多いようです。この様子は、端で見ていると楽しくじゃれ合っているように見えることがあります。だから、先生などの大人たちからは、「君たちは仲がいいね」などと勘違いされて流されてしまうことにもなるのです。でも、やっている人、やられている人、そして、その場で見ている人は、これが「いじめ」であることに気づいています。「いじり」は、大人からの気付きや助けが期待しにくい分、「いじめ」より悲惨なときがあります。人をからかってつくる笑いに本当の楽しさはありません。人をいやな気持ちにさせて、それを楽しむことは、人としてしてはいけないことです。

先週もいいましたが、もう一度皆さんに伝えます。五小は、先生も子どもも「自分や人が嫌がることは決してしない」を心に刻んで、していいことと悪いことを正しく判断して行動できる人になって欲しいと思います。

今朝の、校長先生の話は終わります。